

札幌皮膚病理研究所 NEWS



2003年12月号

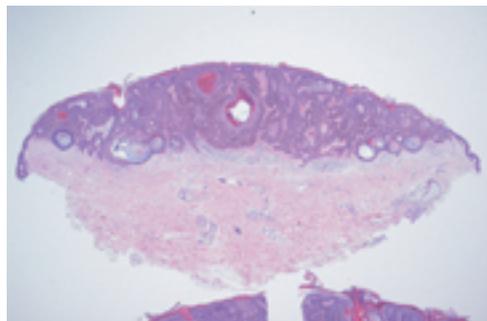
今月の症例



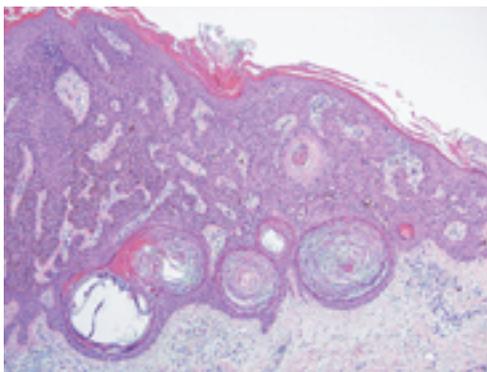
Seborrheic Keratosis

62才 男性 右胸部

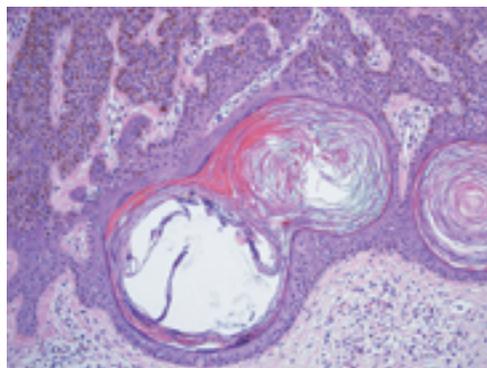
臨床診断: seborrheic keratosis
病理組織診断: seborrheic keratosis



軽度に隆起した上皮性の新生物がある。



新生物は、網状に分布する基底細胞様細胞とそれらに連続した角化性の膿腫構築で構成されている。



膿腫構築は、内容物に角質と毛があり、毛包漏斗部の一部である。

臨床医の声



横浜市で開業して8年目になります。開業当初から木村先生に病理検査をお願いしています。先生が皮膚病理研究所を開設されてから、ますます気軽に検査をお願いできるようになりました。現在は月1回の手術の検体と、必要にせまられて行う生検の検体をお願いしています。

最近、きちんと検査をして治療をしていくことの大切さを実感しています。難しい症例は、治療についても木村先生にアドバイスをいただいております。開業医は、すぐ相談できる先生がいないので、とても心強い限りです。

この札幌皮膚病理研究所ニュースは、とてもカラフルで見やすく毎回楽しみに拝見しております。先生方やスタッフの皆様の写真が載っているので、とても親近感を感じます。

真摯にお仕事をされている研究所の皆様の様子は、私にとっては元気をもらえるビタミン剤のような存在です。

医療法人社団 翠心会
おさく皮膚科
尾作文



◆ニュースについてのお知らせ◆

毎月皆様にお届けしておりますNEWSは、ホームページでもご覧いただくことができます。ぜひご利用ください。

～各種お申込・お問い合わせは当研究所まで～
札幌皮膚病理研究所
〒001-0018
札幌市北区北18条西3丁目21-793
TEL 011-756-4810 FAX 011-756-4842
E-mail office@sapporo-dermpath.com
Website www.sapporo-dermpath.com

What's new?

今月の研修生をご紹介します。

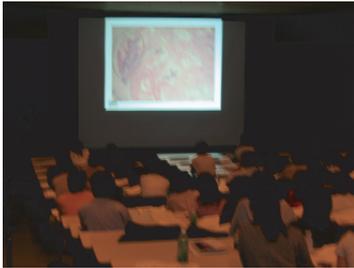


手前右；森山昌樹先生
(日本細胞病理ラボラ
トリー)
奥中央；清野みき先生
(衣笠病院)



中央；小坂真紀先生
(仁和会総合病院)

皮膚外科手術のための皮膚腫瘍病理学講座大阪会場
(11月16日)



新たに論文が掲載されました

Unna型色素細胞性母斑 村澤章子、木村鉄宣
Visual Dermatology 2(11)1140-1141 2003

Miescher型色素細胞性母斑 村澤章子、木村鉄宣
Visual Dermatology 2(11)1142-1143 2003

色素細胞母斑アンケート
木村鉄宣他、斎田俊明(総括)
Visual Dermatology 2(11)1201-1208 2003

後天性色素細胞性母斑：Unna型、Miescher型、Spitz型、Clark型 一後天性の病変は本当に後天性か？
村澤章子、木村鉄宣
皮膚病診療 25(11)1205-1210 2003

多型慢性痒疹77例の病理組織学的検討
村澤章子、木村鉄宣
日本皮膚科学会雑誌 113(11)1671-1676 2003

2004年開催セミナーのお知らせ

専門医のための皮膚病理講座 皮膚病理学 応用編 (東京)
臨床をみて病理を考え、病理をみて臨床を考える
2004年5月8日(土)、9日(日)

研修医のための皮膚病理講座 皮膚病理学 基礎編 (東京)
専門医になるために必要な皮膚病理の知識や
専門医試験受験対策を含む
2004年6月26日(土)、27日(日)

皮膚病理診断ワークショップ 東京
皮膚軟部組織腫瘍病理診断のガイドライン作成
2004年8月7日(土) (予定)

皮膚外科手術のための皮膚腫瘍病理学講座 (東京会場)
手術切除されることの多い良性と悪性の皮膚腫瘍の
病理組織所見を中心に解説し、手術方法や切除範囲を
考えるための情報を提供します
2004年8月22日(日)

皮膚病理診断コンセンサスセミナー (札幌)
皮膚軟部組織腫瘍病理診断のガイドラインの作成
2004年9月4日(土)、5日(日)

皮膚外科手術のための皮膚腫瘍病理学講座 (大阪会場)
(内容は東京会場と同様)
2004年9月28日(日)

第12回札幌皮膚病理セミナー
～世界の皮膚病理学と皮膚病理医～ (東京)
講師；Philip E. LeBoit, M.D. (University of California,
San Francisco Dermatopathology Section)
2004年10月29日(金) 特別講演
10月30日(土)
10月31日(日) (いずれも予定)

皮膚病理指導医養成講座 (年6回連続講座 東京)
2004年4月開講
研修医を指導するために必要な皮膚病理学
6回連続受講の他、単発での受講も受け付けます
2004年 4月24日(土) 7月 3日(土)
8月21日(土) 10月23日(土)
12月11日(土) 2月 5日(土)

今日の皮膚病理診断

その③ 皮膚病理学と皮膚病理診断学 1

皮膚病理学が、皮膚疾患の病理組織学的な検討を目的としているのに対し、皮膚病理診断学は、皮膚疾患を病理組織学的に診断する技術・知識・方法の検討が目的だ。

私が最初に手にした皮膚病理の教科書は当時、皮膚病理のバイブルといわれ、現在でも多くの皮膚科医や病理医に愛用されている「Histopathology of the skin(Lever, WF著)」だった。

当時皮膚科の研修を受けた80年代の北大皮膚科では、週一回、この本の記載順に従って標本が準備され、診断をつけさせるという皮膚病理の研修プログラムがあった。私たち研修医は、標本を検鏡、Leverの教科書に載っている病理組織写真と照らし診断をつけた。

指導医の説明は疾患の病理学的な特徴が主体で、ある病変をどのような理由でPsoriasis：乾癬と診断したかではなくPsoriasis：乾癬にはどのような病変が出現するかが説明された。

前者が皮膚病理診断学、後者が皮膚病理学の立場ということになる。この違いお分かりだろうか。Leverの教書は、皮膚病理学の教科書ではあったが、皮膚病理診断学のものではなかったのである。

病理報告書を書く皮膚病理診断の現場の事情は、当時わが国でも米国でも同様で、病理医はまず臨床医の書いた病理検査の依頼状を読み、病名や臨床症状を確認し、Leverの教書やPinkus Guide to Dermatohistopathologyの該当する疾患の記載や写真との一致を確認する。一致していると、「臨床診断と矛盾していない」と病理診断された。

2001年「北海道医療新聞掲載記事より」

その④ 皮膚病理学と皮膚病理診断学 2 に続きます

今後のスケジュール

2003,11,22
講演；国際病理アカデミー スライドセミナー
場所；東京都新宿区 東医保健会館

2003,11,26
症例検討；旭川医科大学皮膚科 カンファレンス
場所；旭川医科大学

2003,11,21
講義；分子細胞病理学(皮膚の病理) 講義
場所；北海道大学医学部

2003,11,30
セミナー；皮膚外科手術のための皮膚腫瘍病理学講座
場所；九州大学コラボステーション2階視聴覚ホール

2003,12,4・8・11(3回)
講義；臨床微生物学
場所；北海道大学付属医療技術短期大学部

発刊責任者；定久 恵子